

受け手の想定はプレゼンテーションの魅力を高めるか

小野田亮介(山梨大学)

キーワード: プレゼンテーション, 受け手の想定, 受け手に合わせた調整

問題と目的

聞き手や読み手にとって分かりやすく、説得的な情報発信を行う上では、受け手に合わせた情報の調整が必要である(Grice, 1975; Krauss & Fussell, 1991)。プレゼンテーション活動において、こうした指摘は「聞いている人をイメージしましょう」といった指導として実践されることも多いだろう。本研究の目的は、送り手が「受け手を具体的に想定した」と自己評価したとき、その評価がプレゼンテーションの情報量や、受け手に合わせた情報の調整量、そして受け手からみたプレゼンテーションの魅力評価とどのように関連しているのかを明らかにすることにある。これらの検討を通し、受け手が魅力を感じるプレゼンテーションの特徴について明らかにする。

方法

対象者

中学校1年生80名が参加した。このうち、全授業に参加した73名(男子42名, 女子31名)を分析対象者とした。

対象授業

ビブリオバトル(各参加者が1冊の本について5分間でプレゼンテーションし、聞き手が一番読みたいと思った本に投票し、チャンプ本を決定する書評のゲーム)を参考とした「本の魅力を伝える授業」を対象とした。この授業では「話を聞いている人たちが、その本(各生徒が選んだ好きな本)を読みたくなるようなプレゼンテーションを行う」ことを目標として進められた。授業は「魅力となる情報の探索→提示する情報のアウトライン化(1~2限)→個人練習(2限)→ペア練習(3限)、小グループ発表(4限)→全体発表(5限)」の5時限から構成された。

測定

受け手意識 2限の個人練習後に、(1)情報探索、(2)情報提示(アウトライン作成)、(3)個人練習での受け手意識について「1: 想定していない、2: 特定でない個人・集団を想定した、3: 特定の個人・集団を想定した」の3件法により回答を求め「受け手意識得点」として扱った。

提示された情報量 アウトラインに記述された情報項目を提示された情報量として捉え、項目の総数を「総情報数」という指標として扱った。

受け手に合わせた調整 ペア練習における相互フィードバック後の修正を、受け手に合わせた調整として捉え、修正箇所の総数を「総修正数」という指標として扱った。

受け手の魅力評価 7~9名の小グループ発表時に、一番読みたいと思った本への投票を行い、各グループで最多得票数を得てグループ代表として選ばれた生徒を、魅力的なプレゼンテーションを行っていた生徒として評価することとした。

結果と考察

受け手意識の特徴

各段階の受け手意識の自己評定得点は、情報探索($M = 1.73, SD = 0.75$), 情報提示($M = 2.04, SD = 0.65$), 個人練習($M = 2.22, SD = 0.65$)であった。一要因分散分析の結果、有意な平均値差が認められ($F(1.85, 132.94) = 15.77, p < .01, \eta_p^2 = .08$ 95%CI [.03, .15]), 多重比較(Holm法)により、情報探索<情報提示<個人練習と、聞き手への発表が近づくにつれて評定得点が高くなることが示された($p < .05$)。

受け手意識とプレゼンテーション内容

総情報数を目的変数、各段階の受け手意識得点を説明変数とした重回帰分析の結果、有意な回帰式は得られなかった($F(3, 69) = 0.20, n.s.$)。同様に、総修正数を目的変数とした場合でも有意な回帰式は得られず($F(3, 69) = 0.06, n.s.$)、受け手意識の自己評定が情報量や、受け手に合わせた調整量と関連している証拠は得られなかった。

受け手意識と受け手からの魅力評価

投票による選抜の有無(なし=0, あり=1)を目的変数、各段階での受け手意識得点を説明変数としたロジスティック回帰分析の結果、いずれの変数についても有意な係数は認められなかった。

次に、各段階の受け手意識得点、プレゼンテーションに含まれる総情報数、受け手に合わせた調整の結果である総修正数を説明変数に加えた分析を行った。その結果、総情報数($b = 1.30, p < .01, OR = 3.68 [1.68, 12.94]$), 総修正数($b = 0.58, p < .01, OR = 1.78 [1.26, 2.83]$)の両変数で有意な正の係数が得られた。以上より、受け手からみて魅力的なプレゼンテーションを実現するためには、受け手を想定するだけでなく、豊富な情報を提供するとともに、その情報を受け手に合わせて調整する必要があると考えられる。